The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	条件節と理由節 ： ナラとカラの対比を中心に
Author(s)	網浜, 信乃
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1990, 24, p. 19-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

条件節と理由節

——ナラとカラの対比を中心に——

網浜信乃

1　はじめに

（1）　もし一人で旅行するのなら，どこの国へ行く？

（2）　「夏休みに独り旅に出ることにしたの」

「へえ。＊一人で旅行するのなら，どこの国へ行く？」

（1）と（2）は，ともにナラを用いた文であるが，（1）がごく自然な文なのに対し，（2）はかなり不自然に感じられる。なぜだろうか。

本論文では，いわゆる複文のうち，一般に条件節・理由節と呼ばれる節と主節とから構成される文を取り上げる。

従来の複文の研究は，日本語教育などからの要請によって行なわれてきた用法記述的な研究と，文の構造的な成り立ちを追求するという目的から複文を扱う研究の，大きく二つの類に分けられると思われる。条件節・理由節に関しては，前者に属する研究が多く，条件節ではト・タラ・バ・ナラ，理由節ではカラ・ノデといった複数の接続形式の用法記述と，使い分け要因の解明に主な関心が向けられてきた。

一般に，文は何らかの客体的な事態を描く部分（コト）と，その事態に対する話し手の主体的な把握の仕方や態度を表わす部分（ムード）から成り，最終的に何らかの伝達的意味を担うものである。このような文の成立と意味を扱い考察するのがいわゆる文論であるが，従来の複文研究には，

そうした文論的な観点が欠けているように思われる。

このような問題意識から，本稿では，条件節と理由節とを対置して考察を進める中で，上述のような構造と成り立ちを持つ文において，条件節や理由節がどのような位置にあり，どのような機能を果たしているかということを考えたい。(1)と(2)の文法性の違いが何に起因するのかということは，そのような観点で考察して，初めて解明できるものと考える。

2　前提となる議論

2. 1. ナラの機能

条件接続形式ト・タラ・バ・ナラのうち，ナラが他の三形式とかなり異なった性格を持つことはよく知られている。先行諸研究[1)]の議論を踏まえ，ナラの用法的特性に対する本稿での見解をまとめておく[2)]。

ト・タラ・バに共通する性格は，条件節に描かれた事態(P)と，主節に描かれた事態(Q)の間に，P→Qという時間的継起関係が常に成り立つことである。その点で，これらの形式による条件節は，時を表わす従属節に連続し，重なるような意味を持っており，Pが純粋に仮定的な事態ではない，すなわち，時間が経てば確実に生起するような事態である場合や，過去に既に生起した事態である場合にも，用いることができる。

(3)　明日になれば，仲直りするだろう。

(4)　角を曲がると，郵便局があった。

これらの文のト・タラ・バを，ナラに置き換えることはできない。

(3)＊明日になるなら，仲直りするだろう。

(4)＊角を曲がるなら，郵便局があった。

また，ナラの文の場合，時間的継起関係が保証されず，前後関係がQ→Pのように逆転した場合にも用いられる。

(5)　この本を読むなら，貸してあげます。

更に重要なことは，ナラを用いて表わされた条件節は，テンスの対立を示すことができるということである。

（6） 太郎が買うのなら，僕も買うよ。

太郎が買ったのなら，僕も買うよ。

以上のことから，ナラの機能は，独自のテンスを備えたある事態を真と仮定することにあると考えられる。

（7） ナラの意味・機能

Pナラ：Pを仮に真とすれば （Pは独自のテンスを持つ事態）

2. 2. 文の階層構造と二つのカラ節

文は包み包まれの階層構造を成しているが，様々な接続節も，内部要素の現われ方により，文の構造的な段階に対応する形で，文的度合いのより低いものからより高いものまで，いくつかのグループに分類することができる。ここでは，田窪（1987）の分類を参照する。

（8）

	統語範疇	意味タイプ
A 1＝様態・頻度の副詞＋動詞	―動詞句	動作
A 2＝頻度の副詞＋対象主格＋動詞＋(否定)	―動詞句	
B＝制限的修飾句＋動作主格＋A＋(否定)＋時制	―節	事態
C＝非制限的修飾句＋主題＋B＋モーダル	―主節	判断
D＝呼び掛け＋C＋終助詞	―発話	伝達

接続節は上の四つのどの段階までを内部要素として含みうるかによって次の四グループに分類される。

（9）

A：―て（様態），ながら（同時動作），つつ，ために（目的），まま，ように（目的）…

B：―て（理由・時間），れば，たら，から（行動の理由），ために（理由），ので（？），ように（比況）…

C：から（判断の根拠），ので，が，けれど，し，て（並列）…

D：と（引用），という

さて，上の分類で，カラはB類とC類の二つの段階に入れられている。

(10)ア　雨が降ったから，川の水が増えた。

イ　川の水が増えているから，雨が降ったのだろう。

アのカラ節は「川の水が増えた」原因・理由を表わしており，田窪のいう「制限修飾句」でありB類に属する（以下，〈カラb〉と呼ぶ）。一方，イのカラ節は「雨が降った」原因を表わすのではなく，そのように話し手が推測する理由を述べている。これは「非制限修飾句」でありC類に属する（以下，〈カラc〉と呼ぶ）。二者の属する階層が異なることは，次のような統語的な振る舞いの違いによって明らかになる。

(11)ア　〔雨が降ったから，川の水が増えた〕のですか。

イ??川の水が増えているから，〔雨が降った〕のですか。

(12)ア　何が降ったから，川の水が増えたのでしょうか。

イ＊何が増えているから，雨が降ったのでしょうか。

日本語では疑問の焦点は原則として文末の述語にあるため，文末述語以外の要素を焦点にするためには「ノ」のスコープにその要素を入れる必要がある。C類以上の要素は「ノ」に含まれ得ないため，(11)イは不適格となる。また，焦点になりうる位置は疑問詞が生じうる位置でもある。(12)イの不適格性は，焦点になりえないC類以上の要素には疑問詞が生じないことから説明される。また，当然，二つのカラ節はその内部に含みうる要素の範囲が異なる。〈カラc〉にはムードや丁寧の要素も現われる[3)]。

(13)ア??雨が降っただろうから，川の水が増えた。

??雨が降りましたから，川の水が増えました。

イ　川の水が増えているだろうから，雨が降ったのだろう。

川の水が増えていますから，雨が降ったのでしょう。

田窪の議論は意味的に異なる二つのカラが階層構造において異なる段階に属することを明確に示している。

3 カラ節とナラ節の平行性

3. 1. 〈カラ c〉再考

ここで，本稿で〈カラ c〉と呼ぶことにした「判断の根拠」を表わすカラ節について観察を加えよう。

(14) とすれば，加奈彦は和食が余り好きではないから，洋食を食べるつもりだろう。 (広き迷路)

〈カラ c〉の主節は，話し手の思考の結果を表わすものである。(14) の例でいえば，「加奈彦は和食が余り好きではない」ということから考えた話し手の結論が「洋食を食べるつもりなのだろう」なのである。つまり，カラ節に描かれた事態を「根拠」として，話し手が「推論」を行ない，自ら導き出した「結論」が主節に現われるのだと考えられる。文全体の意味的な構成は，次のようになろう。

(15) 話し手の推論：〔 根拠 〕カラ，〔 結論 〕

このことは主節に現われるムード形式に制約があることから立証できる。

(16) 一生懸命頼んだのだから，来てくれるだろう。
来てくれるかもしれない。
＊来てくれるそうだ。
??来てくれるらしい。

森山 (1989) が「情報把握」と呼んでいるソウダ，ラシイといった形式は，当該情報が他から得た，話し手以外に由来するものであることを示す形式である[4]。〈カラ c〉の主節が話し手自身の推論の結果であるため，このような形式が共起できないのである。カラ節が〈カラ b〉で「来てくれる」理由を表わしている場合は，主節にこのようなムードの制約はない。

(17) 一生懸命頼んだから，来てくれるのだろう。
来てくれるのだそうだ。
来てくれるのらしい。

3. 2. 〈カラ c〉とナラ節の平行性

田窪（1987）では，条件節はB類に属するものとされている。確かに，条件節は，内部要素にダロウやデス・マスを取り得ないから，構造的にはB類であろう。

しかし，Akatsuka（1983, 1984, 1985）が指摘した次のような現象はナラ節がC類である〈カラ c〉と交渉を持っていることを示している。

(18) X「太郎が試合に出るんだって」
Y「へえ。太郎が出るのなら，彼がピッチャーだろうね」
＊出るから

(19)（Xとの対話のあと，別の人物Zに）
Y「太郎が試合に出るから，彼がピッチャーだろう」

(18)において，話し手YはXから「太郎が試合に出る」ことを聞き，そのことを知っているのに，ナラを用いている。逆に，(19)ではナラを用いることができず，カラを用いなければならない。Akatsuka が注目しているのは，このようなナラ→カラの変換現象である。

が，ここで問題にしたいのは次のようなことである。(19) のカラ節は〈カラ c〉である。そして，(18)と(19)の間では接続形式の変換は起こっているが，それによって結び付けられた二つの事柄の関係には変化が生じていない。(18)においても，ナラ節の「太郎が試合に出る」という事態を根拠として話し手が推論を行ない，引き出された結論が「彼がピッチャーだろう」という主節となっているのである。つまり，意味的な構成は(15)とパラレルである。

(20) 話し手の推論：〔 根拠 〕ナラ，〔 結論 〕

このことは，(19)の主節にカラ節と同様のムードの制約があることから検証できる。

(19′) Y「太郎が試合に出るのなら，＊彼がピッチャーだそうだね」
??彼がピッチャーらしいね」

このような〈カラc〉と平行関係にあるナラ節を〈ナラc〉と呼びたい。

一方，ナラには次のような用法もある。

(21) X「今日はだれが投げるのかしら」
Y「もし太郎が出るのなら，彼がピッチャーだろう」

上の例では，ナラ節は推論の根拠であるとはいえない。「太郎が試合に出る」は話し手が一つの仮想的な事態として設定したものであって，「太郎がピッチャーである」という事態が成立するための条件を示している。このように主節に表わされた事態が成立するための条件を示すナラ節を〈ナラb〉と呼ぶことにする。〈ナラb〉には〈ナラc〉に見られたようなムードの制約はなく，情報把握の形式も共起できる。

(21′) Y「もし太郎が出るのなら，彼がピッチャーだそうだ」
彼がピッチャーらしい」

これまでに区別したそれぞれ二種のカラ節，ナラ節を整理しておく。

(22)

	カラ節	ナラ節
B類	〈カラb〉：事態の理由・原因 〔太郎が行くから花子も行く〕のだそうだ	〈ナラb〉：事態成立の条件 〔太郎が行くのなら花子も行く〕そうだ
C類	話し手の推論：〔 根拠 〕カラ／ナラ 〔 結論 〕 〈カラc〉 太郎が行くから， 花子も行くだろう 〈ナラc〉 太郎が行くのなら， 花子も行くだろう	

3. 3. 文の伝達的意味とカラ節・ナラ節

前節では，カラ節・ナラ節の主節に認識的なムード形式が現われている場合のみを扱ったが，実際の用例はそのようなものばかりではない。次のような〈カラc〉・〈ナラc〉の文を見てみよう。

(23)　日差しが強いから，帽子をかぶって行くべきだ。
　　強いなら
→日差しが強いから，帽子をかぶって行きなさい。
　　強いなら

話し手の推論の結果，例えば「(聞き手は) ～スベキダ」という結論に至れば，主節は命令表現になることもある。「(自分は) ～スベキダ」という結論に至れば，主節は意志表現になるだろう。つまり，話し手の推論の結果がそのような発話をすることなのであり，逆にいえば，〈カラc〉・〈ナラc〉は，命令，意志といった文全体が帯びる伝達的意味そのものにかかり，なぜそのような発話をするかの根拠を表わす働きをしている。

(24)　「寒いから，前まで行きます」(沿線地図)　〔意志〕

(25)　「惚れたわよ。惚れてなきゃ，籍も入ってないのに子供なんか生めないわ」
　「惚れたんなら，男のいうこと，信用してやって下さいよ」
　(あ・うん)　〔依頼〕

しかし，〈カラc〉・〈ナラc〉の文はすべての文類型にわたっているわけではない。次の例のように，質問文にはきわめてなりにくい。

(26)　＊花火が上がっているから，今日は天神祭ですか？
　＊花火が上がっているのなら，今日は何の日ですか？

質問文の意味的特徴は，命題の真偽判断ができないから相手に情報を要求するということである。〈カラc〉・〈ナラc〉の主節は話し手自身の結論であるため，意味的に両立不可能であるからだろう。ただし，疑問表現

すべてが不可能というわけではなく，例えば，いわゆる確認要求的な質問文は可能である。

(27) 花火が上がっているから，今日は天神祭だよね。
花火が上がっているなら，今日は天神祭でしょう？

(26)の話し手が真偽判断を初めから放棄しているのに対し，(27)の話し手はそうではない。推論によって一旦自ら結論を出し，それが正しいかどうかの判定を聞き手に求めているので，可能になるのだと思われる。

一方，〈カラb〉・〈ナラb〉は，主節に描かれた事態にかかり，それを修飾するものであるから，文の伝達的意味には関わらず，それに包みこまれた事柄レベルに納まるものである。

(28) 「明日，ひまかい？ ひまならつきあってもらいたいんだ」
(結婚の資格) 〔依頼〕

(29) 「一か月でいいの？」
「そうよ。それで駄目なら，別れてあげる」
(三十三間堂の矢殺人事件) 〔約束〕

〈カラb〉・〈ナラb〉の文は質問文にも極自然になることができる。

(30) 天神祭だから，花火が上がっているんですか？
もしそれで駄目なら，別れてくれるの？

本稿の冒頭に見た(1)と(2)の文法性の違いは，(1)が〈ナラb〉であるのに対し，(2)が〈ナラc〉であるということから説明できる。

4 〈ナラc〉の使用条件

すでに見たように，ナラ節は構造的にはB類の接続節である。にもかかわらず〈ナラc〉が〈カラc〉と共通した統語的振る舞いを見せるのは，両者がともに「話し手の推論の根拠」を表わし，主節にその「結論」を要求するものだからである。

ところで，ナラの基本的な意味は(7)に記したようなものと思われる。カラと比較すれば，二つの命題PとQを結び付けるさい，ナラとカラのいずれを用いるかを決定するのは，話し手のPの捉え方であろう。つまり，

(31) 話し手がPを〔＋仮定性〕の事態として捉えているとき

：PナラQ

もし太郎が行くのなら，君も行ってよい。

話し手がPを〔—仮定性〕の事態として捉えているとき

：PカラQ

太郎が行くから，君も行ってよい。

が原則のはずである。

すると，ナラ節がなぜ「話し手の推論の根拠」を表わすことができるのかということが問題になる。話し手がPを仮定的な事態として捉えている場合，その〔＋仮定性〕ゆえに主節を制限的に修飾する意味が生じ，Pは事態Qが成立するための条件（すなわち〈ナラb〉）を示すことになってしまうからである。以上のことから，本稿では次のように考える。話し手が何らかの事態Pを根拠として推論を行ない結論Qを述べるときは，本来的には「PカラQ」で表現される。しかし，話し手がPを〔—仮定性」の事態と捉えていても，何らかの語用論的な要因によってナラを用いなければならない場合，あるいは，用いることができる場合がある。つまり，〈ナラc〉はいわば例外的に理由節の領域に踏み込んだ条件節である。

では，〈ナラc〉の使用を決定づける語用論的条件とは何であろうか。以下に探ってみたい。

4. 1. Akatsuka, Kamio の説

〈ナラc〉の使用条件を探る手掛かりとして，Akatsuka (1983, 1984, 1985) の指摘したナラ→カラ変換の現象を再考する。

(32) X「僕，今度の学会に行くことにしたよ」

Y「そう。君が行くのなら，僕も行くよ」

＊行くから，

(33)　(Xとの会話の後，自分の妻に電話で)

Y「Xさんが学会に行くから，僕も行くよ」

＊行くのなら，

Akatsuka は，自然言語の形式と人間の事象に対する認識の仕方の関係について論じ，最終的に次のような認知スケールを提示するに至っている。

(34)

現実相	非現実相
	↖新規獲得情報　　反事実的情報↗
事実的情報	←……不確実情報……→

「現実相」とは，話し手にとって真であることが確定している情報の属する領域であり「非現実相」とは，話し手にとって真であるかどうかが不明である情報（不確実情報）や，真でないということが明らかである情報（反事実的情報）が属する領域である。さて，Akatsuka の主張の中心は，これらの「現実相」と「非現実相」が連続体をなしている，ということにある。それは，次のような仮説として表現されている。

(35)　Akatsuka の仮説：

〝話し手が新規に獲得した情報は，いったん「非現実相」に入りその後「現実相」に移行する。〟

ナラ→カラ変換の現象は，Akatsuka の仮説によれば次のように説明されることになる。ナラは「非現実相」に属する情報を表す形式であり，カラは「現実相」に属する情報を表す形式である。(32)の話し手Yは，「Xが学会に行く」ということを真だと認めているがそれはYにとって新規に獲得したばかりの情報なので「非現実相」扱いとなりナラでマークされる。しかし，獲得してからある短い時間を経た(33)では，先の情報は「現実

相」に移行しているのでカラでマークしなければならなくなる，というのである。

Akatsuka の仮説は，非常に興味深いものであるが，ナラ→カラ変換の現象の説明として十分であるかどうかについては疑問がありそうである。例えば，(32)のXとYの会話の後で，Yが発話する相手が自分の妻でなく，当のXであるとすればどうであろう。

(32′)　(しばらく別の話をした後，再びXに)

Y「さっきの話だけど，君が行くのなら，Rも行くだろうね」

??行くから，

(32)の結果とは逆に，ナラが適格であり，カラが不自然になる。また，次のような状況も問題となる。

(36)　(Xが庭に，YとZが家の中にいる状況で)

X (Yに)「雨が降ってきたよ」

Y (Zに)「＊雨が降ってきたのなら，ゴルフは止めなさい」

降ってきたから，

話し手Yにとって「雨が降ってきた」ことは新規獲得情報であるのに，この状況ではナラを用いることができず，カラを用いなければならない。これらの例が Akatsuka の説では説明できない。

一方，Kamio (1986) は，「情報のなわ張り理論」によってナラ→カラ変換の現象を説明することを試みている。

Kamio は，ある情報と話し手および聞き手との間の心理的な距離は〈近〉であるか〈遠〉であるか，すなわち「なわ張りに属する」か「属さない」かという二つの目盛りによって測られる，と仮定する。よって，ある文で表現された情報は，話し手のなわ張りに属するか否かと，聞き手のなわ張りに属するか否かの，二つの尺度によって交叉的に四つの場合に分けられる。そして，(37)のように分けられたA，B，C，Dの情報は，そ

(37)

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞きなわの張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

れぞれ異なる文形で表現されるとする。「直接形」とは，文末でいえば，主述語の言い切りの形（もしくはそれにです・ますの付加されたもの）であり，「間接形」とは，主述語にラシイ・ヨウダ・ソウダ・ッテ・ミタイダなどの要素が接続した形であるという。「直接ね形」「間接ね形」は，それぞれ「直接形」「間接形」に義務的に終助詞「ね」が後接した形である。

さて，ナラ→カラ変換現象に対する Kamio の説明を(32)，(33)に添ってみてみよう。Kamio によれば，ナラは間接形であるという。(32)において「君が行く」という情報は聞き手Xの行動予定に関するものであるため，話し手Yのなわ張りの外・聞き手Xのなわ張りの内の情報であることになり，よって間接形であるナラでマークされる。一方，(33)では「Xさんが学会に行く」ことを既に知っているYが未だ知らないYの妻に伝えるわけであるから，この情報は話し手Yのなわ張りの内・聞き手のなわ張りの外の情報ということになるため，間接形であるナラを用いることができず「直接形＋カラ」の形にせねばならない。以上のように Kamio は説明するのである。

Kamio の立場を取れば，先に Akatsuka 説に対する反例としてみた(32′)は説明可能である。なぜなら，(32)の対話からいくらか時間の経過した(32′)の状況においても「君が行く」という情報が聞き手Xの行動予定に関するものである限りこの情報が話し手Yのなわ張りの外・聞き手Xのなわ張りの内にあるということは不変であるからである。(32′)においてナラが適格であり，カラが不適格であるという事実は，Kamio 説を支持する

ものであろう。(36)についても，Kamio 説で説明することができる。

ところが，Kamio の説にも問題点がある。「情報のなわ張りの理論」を用いて説明しようとするならば，(32)と(33)でそれぞれ用いられている形式が，間接形対直接形の明確な対立を示さねばならないわけだが，その点が不鮮明である。Kamio は，ナラが

(38)　君が寂しいのなら……

のように話し手以外を主体とする心理文に用いうることを根拠として，ナラを間接形であると述べているが，カラについては，その形式自体が直接形であるとはいっていない。(33)においてカラに前接する述語「行く」が直接形であることをとり上げて，(32)と(33)の間接形対直接形の対立を主張しようとしているようである。しかし，この主張が納得し難いものであることがすぐ明らかになる。なぜなら，(33)の「行く」を間接形に置き換えて，

(33′)　Xさんが行くそうだから，僕も行くよ。
　　行くらしいから，

としても，全く不自然さが生じないからである。つまり，カラは直接形と間接形のいずれにも接続しうる。このことから，ナラ→カラ変換と直接形対間接形の対立とは次元の異なる現象であると考えざるをえない。

4. 2. 本稿の見解

それでは，ナラ→カラ変換の現象にはどのような説明を与えるべきであろうか。両理論の問題点をふまえて，〈ナラc〉と〈カラc〉の使い分け要因を追求してみよう。

Akatsuka 説では，(32′)や(36)のような例が説明できない。このことは当該情報が話し手にとって新規の情報であるか否かという観点だけでは不十分であることを示している。聞き手がその新規情報を提供した当の人物であるかどうか，という点が，ナラとカラのいずれが用いられるかに関わ

っているということである。つまり，Akatsuka 説に欠けているのは，聞き手との関係という観点である。Kamio 説で(32′)と(36)が説明できるのは，「情報のなわ張り理論」が聞き手との関係という観点を有しているからにほかならない。しかし，「情報のなわ張り理論」で主張されている文末形式の使い分けがナラとカラの使い分けと同次元で論ずることができるものでないということは，前節で見たとおりである。

以上の議論から，本稿では次のように考える。

まず，1の例から，新規情報を得た話し手が，その情報の提供者に向かって発話する場合、〈カラc〉を用いることができないことは確実である。このことから，次のような仮説を立てる。

(39) 仮説1

話し手が聞き手から新規に獲得したばかりの情報は〈カラc〉でマークできず，〈ナラc〉でマークしなければならない。

仮説1について重要な点が二つある。第一点は，「聞き手から」という用件であり，この点が Akatsuka 説には欠けていたわけである。

第二に，「〈カラc〉で」という要件を強調しなければならない。次の例のイのように，新規に獲得した情報を「カラ」節で表わすこと自体は可能である。

(40) 「次郎君って，高校時代は水泳部にいたのよ」

ア 「へぇ。水泳部だったのなら，泳ぎが上手なのね」

イ 「へぇ。水泳部だったから，泳ぎが上手なのね」

ただし，イで可能な読みは，話し手が「次郎が泳ぎが上手である」ことは既に知っていたが，その理由が「水泳部だったから」だと初めて知ったという場合のみであろう。つまり，イのカラ節は〈カラb〉の解釈しかできない。仮説1の意味するところは，話し手が聞き手から新規に獲得した情報を「推論の根拠」とする場合，それをカラで表わすことができず，代わ

りにナラを用いねばならない，ということである。(40)イが示すように本稿で〈カラb〉と呼んでいるようなカラ節ならば可能だという事実は，Akatsuka, Kamio ともに全く考慮していないようである[5]。

仮説1は，義務的に〈ナラc〉が選択される条件である。(32)はこの条件に該当する典型的な状況であり，ここではけっして〈カラc〉を用いることができない。しかしながら，現実に起こるのは，(32)のような典型的な状況ばかりではない。〈ナラc〉の使用が随意的であるといえるような状況も考えられる。

まず，(32)の話し手Yが新規情報の提供者であったXに向かって，しばらく別の話をしたあとで発話するという場合である。この場合，先に(32′)でみたように〈ナラc〉を用いることもできるが，下のイのように〈カラc〉を用いることも可能である。

(32′)ア「さっきの話だけど，君が行くのなら，Rも行くだろうね」

イ「さっきの話だけど，君が行くのだから，Rも行くだろうね」

ただし，注意せねばならないのは，イにおいてはカラの前に「のだ」が介されていることで，これがなければやはり不自然な文になってしまう。

(32′)ウ「さっきの話だけど，??君が行くから，Rも行くだろうね」

(32′)イにおいて「行く」が不適で「行くのだ」が適格なのは，もともと「君が学会に行く」が，聞き手Xが提供した，Xの行動予定に関する情報であるからであろう。つまり，この時点で初めて Kamio が「情報のなわ張り理論」で主張しているような文末形式の使い分けが問題になるのだと思われる[6]。が，日本語において「直接形」と「間接形」の対立が重要であることが認められるとしても，その使い分け要因が「情報のなわ張り理論」の主張どおりであるかどうかには疑問があると思われる。前節で見た(33)と(33′)で，話し手が聞き手にとっての未知の情報を伝えるという全く同じ状況（話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り外）であるのに，直接

形・間接形がともに自然に用いられるという事実は，Kamio 理論の不備な点を示唆するものであろう。

さて，(32′)において〈ナラｃ〉と〈カラｃ〉がともに許されるのはなぜだろうか。ここでイのように〈カラｃ〉が許されるのは，話し手ＹがＸから「Ｘが学会に行く」ことを聞いた直後ではなく，聞いてからある程度の時間を経て，会話に一区切りついたあとであるため，仮説１の制約にかからなくなったからだと考えられる。つまり，この情報はＹにとってもはや新規情報ではなくなったのである。一方，アのように再び〈ナラｃ〉を使うことも可能であるが，その場合はＹがこの情報に対して，Ｘから新規に提供された情報としての扱いを続けているということになろう。アとイでは，ニュアンスに少し差があるように感じられるが，それは〈カラｃ〉を用いると，〈ナラｃ〉を用いた場合に比べ，その情報を既に自分の知識に同化したものとしているような印象を与えるためと思われる。

(32′)は，仮説１の「新規に獲得したばかりの」という要件に関して，新規の情報として扱うかどうかが随意的になった場合であり，それを許すのは情報を得てからの時間的経過である。一方，「聞き手から」という要件が問題になるような状況もある。

(41)　(部長Ｘとその友人ＹがＸの会社で話している場面で)

Ｘの秘書「部長，もうすぐ会議が始まりますが」

ア　Ｘ（Ｙに）「＊会議があるのなら，終るまで待ってくれ」

あるから，

イ　Ｙ（Ｘに）「会議があるのなら，もう失礼するよ」

あるようだから，

アで〈ナラｃ〉が不適格なのは「会議がある」という情報が聞き手Ｙの提供したものでないからである。それでは，イで，当該情報が聞き手Ｘから得たものでないという点ではアと全く同じであるのに，〈ナラｃ〉が自然

に用いられるのはなぜだろうか。

ここには，おそらく，３人の人物間の立場と役割関係が関わっていると思われる。Ｙから見た場合，Ｘの秘書はＸの行動予定を把握している，Ｘの領域に属する人物であるから，Ｘの秘書の提供した，Ｘに関する情報「会議がある」は，Ｘ自身が提供した情報に準じるものである。そのため，Ｙはこの情報を「聞き手（Ｘ）から」獲得した情報と見なして，〈ナラｃ〉を用いて表わすことができるのではないだろうか。

このように，〈ナラｃ〉の随意的な使用が許されるのは，仮説１が示す条件に何らかの意味で準じるような状況だと考えられる。そうした随意的な使用については，大変興味深い問題であるが，ここではこれ以上立ち入ることができない。今後検討を加えたい。

以上，〈ナラｃ〉の使用条件を探ってきた。ナラの用法について，久野(1973)，蓮沼（1985）などの先行研究は，ナラ節にはしばしば「他者（典型的には聞き手）の意向・主張」が関与する，という記述をしている。しかし，ナラという形式がそうした意味を本来的に持っているのではないだろう。〈ナラｃ〉は聞き手から得た新規の情報をマークするものであるため「他者の意向・主張」といった意味合いを帯びやすい。〈ナラｃ〉として用いられている用例が多いことから，このような観察がなされてきたのだと思われる。

5　おわりに

本稿では，ナラ節とカラ節を取り上げて，条件節と理由節が文において果たす意味的機能を観察してきた。事態レベルで機能する場合と発話伝達レベルで機能する場合の二つの用法がある[7]ことは条件節と理由節が様々な接続節の中で独自に有している特性だと思われる。同時に，このことは条件節と理由節の深い関わりを改めて示唆するものであろう。

注

1) 久野（1973），鈴木（1978），寺村（1981），蓮沼（1985）など。

2) 用言（動詞・形容詞・助動詞）にナラが接続する場合，「ノ」を介在させる場合が多いが，ナラとノナラの間に大きな意味的な差異はないようである。が，「ノ」がないとやや落ち着きが悪く感じられる場合もあるので，厳密には区別が必要かもしれない。また，「タナラ」という形は，過去形に接続した「タノナラ」とは意味が異なり，タラのやや古めかしい形と考えたほうがいいようである。

大学に合格したのなら，お祝いをあげましょう。

大学に合格したなら，お祝いをあげましょう。

また，名詞に直接接続してNナラの形をとっているもので，かつ節相当の働きをなしていないと考えられる，次のようなものは，ここでは考察から除外しておく。

「太郎はどこ？」「太郎なら，二階にいるよ」

旅館なら民宿に限る。

お金なら要りません。

3) ただし，丁寧の要素については，田窪がB類としているタラ，トといった条件節などにも現われることがあるので，B類・C類を分ける根拠として問題があるかもしれない。

4) ラシイには，「情報把握」の用法だけでなく，森山が「状況把握」と呼び，「状況的な事柄を根拠としての話し手自身の判断」を表わすとしているような用法もある。

5) 坂原（1990）は，Akatsuka（1985）に批判を加えるなかで，話し手にとっての新規情報であるのにカラが用いられる例として，本稿でいう〈カラb〉にあたるようなカラ節をあげている。また，(40) での〈ナラc〉と〈カラb〉の関係は，浜田（1988）が指摘している接続詞「デハ」と「ダカラ」の関係とパラレルである。

6) ノダは，Kamio の「間接形」の中には特に記されていないが，

＊彼は寂しい。

彼は寂しいようだ。

彼は寂しいのだ。

のように，ヨウダなどと同様に，一人称以外を主体とする心理文に用いることから考えれば，間接形に含めて良いものであろう。

7) 本稿では詳しく触れることができなかったが，ナラ以外のト・タラ・バを用いた条件節にも発話伝達レベル的に用いられることはある。

参考文献

久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
坂原　茂（1990）「談話研究の現在と将来」『月刊言語』19-4
鈴木　忍（1978）『文法　Ⅰ』国際交流基金
田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5
（1989）「文脈理解—文脈のための言語理論」『情報処理』30-10
寺村秀夫（1981）『日本語の文法（下）』国立国語研究所
仁田義雄（1987）「条件づけとその周辺」『日本語学』6-9
（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』（仁田義雄・益岡隆志編）くろしお出版
蓮沼昭子（1985）「「ナラ」と「トスレバ」」『日本語教育』56
浜田麻里（1988）「推論と接続語」第2回日本語文法談話会口頭発表資料
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』
Akatsuka, Noriko (1983) Conditionals "Papers in Japanese Linguistics" 9
(1984) Conditionals are discourse-bound "On Conditonals" (Traugott, Elizabeth et al. eds.) Cambridge Univ. Press
(1985) Conditionals and Epistemic scale "Language" 61
Kamio, Akio (1986) "Proximal and distal information: A theory of information in Engilsh and Japanese" University of Tsukuba

（大学院後期課程学生）